



伊勢物語の絵巻をさかのぼる：  
大英図書館所蔵「伊勢物語図会」とその周辺

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 賜鶴子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002592">https://doi.org/10.24729/00002592</a>

言語文化学研究（日本語日本文学編）第六号 抜刷 二〇一一年三月

# 伊勢物語の絵巻をさかのぼる

大英図書館所蔵「伊勢物語図会」とその周辺

青木 賜鶴子

# 伊勢物語の絵巻をさかのぼる

—大英図書館所蔵「伊勢物語図会」とその周辺—

青木 賜鶴子

## 一 はじめに

大英図書館のシーボルト・コレクションに含まれる「伊勢物語図会」(以下「大英図書館本」と呼ぶ)は、室町時代末期頃の書写とおぼしく、現存する伊勢物語の絵入本のうち完本としては最古に属するものである。三帖(三卷)から成り、卷子装を現在のような折本の形に改装したと考えられる。

絵画化の場面選択とその図様が共通する絵巻として、小野家所蔵「伊勢物語絵巻」(以下「小野家本」と呼ぶ)が知られるほか、零本ではあるが静嘉堂文庫所蔵「伊勢物語絵巻」(以下「静嘉堂文庫本」と呼ぶ)、鉄心斎文庫所蔵「伊勢物語絵巻」甲本、乙本(以下「鉄心斎甲本」「鉄心斎乙本」と呼ぶ)なども同趣(注1)であり、おおもとの祖本が共通すると推測される。いずれも

室町時代中後期から江戸時代初期頃の書写とおぼしい。

大英図書館本、静嘉堂文庫本については、『伊勢物語絵巻絵本大成』(羽衣国際大学日本文化研究所編、角川学芸出版、二〇〇七年)解題等、以前にも論じる機会があったが、本稿では、(注2)解題では割愛した事柄を中心に、大英図書館本の現状から祖本の姿を探るとともに、小野家本ほか現存する同趣の絵巻・絵本との比較を通して、おおもとの祖本がどのようなものであったのか、考えてみたいと思う。

## 二 大英図書館本の詞書本文

まず大英図書館本の詞書本文について略述しておく。大英図書館本と小野家本はともに、現在は藤原定家書写本

系の詞書本文を有している。<sup>(註3)</sup> 大英図書館本は、欠落(後述)が二箇所あるほかは、百二十五章段のほぼすべてを備えるが、まれに明らかな誤写も見受けられる。定家本などの一般的な本文を括弧内に入れて列挙すれば、第九段「なして」「思なして」、第二十段「紅葉しにけり」「紅葉しにけれ」、第二十三段「いひかひなくて」「いふかひなくて」、第四十段「いでいぬ」「いでいぬ」、第八十七段「あまのいさり」「あまのいさり火/あまのいさりする火」、第一百一段「左兵衛」「左兵衛督」、同「あるしにまさる」「ありしにまさる」、などである。

このようなミスを除けば、本文はおおむね藤原定家書写本の系統と見てよいが、定家本の中のどの系統に近いとは一概には言えない。

定家本の中で本文が分かれている場合に、大英図書館本の詞書本文が天福本のみと一致して武田本ほか多くの本と対立する場合は一六例ある。対立本文を括弧内に示す。第五段「いけどもえあはで」「いけどえあはで」、第九段「やつはしといひける」「やつはしとはいひける」、第十六段「こと人にもにず」「ことに人にもにず」、第二十三段「過にけらしな」「すぎにけらしも」、第三十一段「よしや草葉よ」「よしや草葉に/よしや草葉の」、第五十八段「ありければこのおとこ」

「ありければおとこ」、第九十六段「あきまつ」「秋たつ」、同「をんなのせうと」「この女のせうと」などである。

逆に、天福本とは対立して武田本ほか多くの本と一致するものは二三例ある。天福本本文を括弧内に示す。第二十七段「かのこざりけるおとこ」「こざりけるおとこ」、第四十六段「えたいめんせで」「たいめんせで」、第六十五段「いとかなしきこと」「いとかなしきこと」、同「このおとこは人の国より」「このおとこ人の国より」、第六十九段「あはじとも」「いとははじとも」、同「女のねやも」「女のねやこ」、第七十四段「山はへだてねど」「山にあらねども」、第八十一段「となむよみける」「となむよみけるは」、第八十七段「石のおもてに」「いしのおもて」、第九十段「にほふらめ」「にほふとも」、第九十七段「このあるじなる人」「かのあるじなる人」、第一百二段「いひちぎれる」「いひちぎりける」などである。

また、第八十九段「年へにける」は天福本・武田本の「年へける」とは対立して流布本と一致し、第一百五段「おきのぬみやこじま」は武田本と一致して天福本・流布本の「おきのぬみで宮こじま」とは対立する。

以上のように現在の大英図書館本の詞書本文はいずれかの定家本の系統に近いということはないが、おおむね定家本

の中におさまり、定家本系の混成本文と言えるだろう。

### 三 第二十三〜二十四段の欠落

次に、欠落部分について考察する。大英図書館本の欠落の一は、第二十三段「高安の女」から第二十四段の本文である。

第二十三段は、「筒井筒」「立田越え」「高安の女」の三場面から成るが、大英図書館本は、「立田越え」の詞と絵まで第一帖が終わり、第二帖は第二十四段の絵から始まっている、第二十三段末尾「高安の女」の場面と第二十四段の詞を持たない。

伊藤敏子氏は、「上巻巻末の二三段第三節（高安の里）は詞書と絵がなく、中巻巻頭の詞書も失われている」（『伊勢物語絵』角川書店、一九八四年）と述べられた。これは小野家本の区切り方―上巻が第二十三段まで、中巻が第二十四段から―を前提にした捉え方であり、区切り方としては正当なのだが、次に述べるように、大英図書館本の区切り方は小野家本とは異なって欠脱部分はすべて第二帖の巻頭にあつたと推測される。

その根拠としては、まず、第一帖巻末の「立田越え」の絵の後が空白のまま残されている点（『伊勢物語絵巻絵本大成』資

料篇八四〜八五頁参照）、第一帖最終紙の変色は軸付紙であつたための糊による変色と見られる点から、第一帖巻末に今以上の紙継があつたとは考え難いことがあげられる。

また、大英図書館本の紙背には、ほぼ全体にわたって、立て替えの際に付されたらしい通し番号が振られているが、第二帖には、第二紙に「四」、第三紙に「五」…とあつて、折本に改装される以前に既に巻頭二紙が失われていたことが知られる（第一紙は表紙を付しているため確認できない）。

失われた二紙には当然、第二十四段の詞書があつたはずである。ところが第二十四段は、たとえば藤原定家書写天福本では二五行分、大英図書館本に換算すると、二六〜七行、およそ四二・五センチの計算になり、一紙分（約五〇センチ）にも足りない（詞書のみ第三帖第二紙が三二行で五一センチ、天福本の三〇行分に相当することから計算）。

試みに第二十三段「高安の女」の幅を計算してみると、詞書本文は天福本で一五行、大英図書館本に換算して一六行、約二五・五センチの計算になる。この場面は小野家本はじめ現存の多くの本が絵を伴っているので、大英図書館本にも絵があつたと考えられ、絵の幅およそ三〇〜四〇センチ前後を加えると、「高安の女」の詞と絵で五五〜六五センチ前後で

あろうか。これと第二十四段の詞を合わせると、ほぼ二紙分の長さで合致する。

このように、失われた第二帖巻頭の二紙に、第二十三段末尾「高安の女」の詞と絵、第二十四段詞が存したと推測され、脱落部分はすべて第二帖巻頭に存したと見られるのである。

なお、第七十六段は大英図書館本の第三帖巻頭にあるが、小野家本では中巻巻末に存し、大英図書館本の第二・第三帖の区切りも、小野家本の中・下巻の区切りとは異なっている。第一・第二帖の区切りが小野家本と同じであったとする根拠はない。

このように、大英図書館本の第一帖は第二十三段「立田越え」まで、第二帖は「高安の女」からと、第二十三段の途中で巻が分かれたれていたとしか考えられないのだが、この内容無視の無謀な分割は、おそらく次の理由による。

大英図書館本の法量については『伊勢物語絵巻繪本大成』研究篇を参照されたいが、各帖は、尾紙(別紙)をのぞいて、第一帖三十三紙、第二帖三十紙、第三帖三十二紙で成っている。ただし第一帖第二二・二三紙の幅は他よりも短く第二三紙は同筆ながら運筆がゆつたりして第二二紙の途中で写し間違いに気づいて差し替えたものらしい。したがって第

一帖は本来は三十二紙となり、第二帖は巻頭二紙が失われているので本来は三十二紙と、もともとはすべて三十二紙となるよう企画されていたことがわかる。すなわち内容によらず各巻同等の長さになる事を優先した結果と考えられるのである。

その傍証になろうかと思われるのが鉄心斎甲本と鉄心齋乙本である。<sup>(注6)</sup>

鉄心齋甲本は、絵のみ一五図を一紙ごとに台紙貼りとした零本で、「おそらく当初は絵巻として制作されたものが、後にばらされた」と推測される。収録されている絵は(章段番号を算用数字で表す)、5「関守」、6「芥川」、7「かへる波」、8「浅間の嶽」、9「八橋」「宇津の山・富士の山」「隅田川」、12「武蔵野」、14「くたかけ」、17「年ごろおとづれざりける人」、18「白菊」、20「春の紅葉」、22「千夜を一夜に」、23「筒井筒」「立田越え」であり、その図様はすべて大英図書館本・小野家本と一致する。大英図書館本・小野家本がともに有する1「春日の里」、3「ひじき藻」、4「西の対」の三場面を欠くのは、絵巻冒頭であるため傷みややすかつたせいだろう。このほかは、大英図書館本第一帖の絵と順序もすべて一致し、小野家本上巻が有する「高安の女」の絵を持たない

のも大英図書館本と同じである。

鉄心齋乙本も絵のみを貼り継いだ零本で、図様はすべて大英図書館本・小野家本と一致する。絵巻二巻、一部に錯簡がある。第一巻には18「白菊」、9「宇津の山・富士の山」「隅田川」、14「くたかけ」、23「筒井筒」、17「年ごろおとづれざりける人」、22「千代を一夜に」、20「春の紅葉」、4「西の対」、5「関守」、6「芥川」、7「かへる波」、9「八橋」、8「浅間の嶽」の一四図を収め、第二巻には、23「高安の女」、24「新枕」、27「盃のかげ」、異本系独自章段「せかみの水」（または28「あふごかたみ」、41「緑衫の袍」、45「ゆく蛭」、49「若草の妹」、50「行く水に数かく」、51「人の前裁に菊」、53「いかでかは鶏の鳴くらむ」、63「つくも髪」、65「笛を吹く男」、66「難波津」、65「恋せじの禊」、69「君や来し」の一五図を収める。

このように鉄心齋乙本第一巻には錯簡があり、巻頭の1「春日の里」、3「ひじき藻」を欠くが、鉄心齋甲本と同様に絵巻冒頭部は傷みやすかったせいだろう。これ以外は、第一巻は大英図書館本第一帖、第二巻は大英図書館本第二帖の内容と一致し、もともとの巻ごとの絵を集めて仕立て直したと思われる。注目すべきは、第二巻の巻頭に「高安の女」の

絵を収めることであり、第七十六段の絵を持たない点でも、この段を第三帖に収める大英図書館本と一致する。

すなわち鉄心齋甲本、鉄心齋乙本のものとの絵巻は、巻の区切り方が大英図書館本と同じであったと推測されるのである。このような大英図書館本のような形と小野家本のような整った形のどちらが古いのかはわからないが、ともかくも大英図書館本の区切り方が偶然にあるいは唐突に生まれたわけではなく、この系統の本の中には、おそらく各巻同等の長さにする目的で第二十三段「高安の女」を第二巻冒頭に置くグループが少なからず存在していたと推測されるのである。

#### 四 第六十五段の場合

もうひとつの欠落は第六十五段本文の一部である。先に述べた第二十三〜二十四段の場合は伝来の過程で誤って欠脱したと考えられるのに対して、第六十五段の詞書本文は書写の段階でのケアレス・ミスとおぼしい。それは「恋せじの禊」の絵のところ、絵の前に、

恋せしとみたらし河にせしみそき  
神はうけすもなりにけるかな

といひてなむいにける

と書いて「恋せじの襖」の絵があり、絵の後は「このおとこをばながしつかはしてければ…」と続けていて、藤原定家書写天福本によれば七行半（大英図書館本の字配りで計算するとおよそ八行分）の本文が脱落している。一紙の長さは一定しており、改装の際の脱落ではあり得ない。

そこで脱落部分を仮に天福本の本文で（一）に入れて示し、前後の大英図書館本本文とともにあげると、次のようになる。<sup>(注7)</sup>

恋せしとみたらし河にせしみそき

神はうけすもなりにけるかな

といひてなむいにける

絵

（このみかとはかほかたちよくおはしまし  
てほとけの御名を御心にいれて御こ  
ゑはいとたうとくて申たまふをきゝて  
女はいたうなきけりかゝるきみにつ  
かうまつらてすくせつたなくかなし  
きことこのおとこにほたされてとて  
なんなきけるかゝるほとにみかと  
きこしめしつけて）

このおとこをはなかしつかはしてけ  
れはこの女のいとこの宮す所女をは

見るように、「このみかど」から書くべきところ、目移りによつて「このおとこ」以降から書いてしまったようだ。

これは大英図書館本を書写した際の誤写か、もつと前の段階での脱落なのか、もとより断定はできないが、少なくとも大英図書館本書写者の単純なミスではなさそうである。

文字だけの写本であれば、あるいは絵巻であっても詞が長く続く部分であれば、八行の目移りは有り得ない話でもないだろうが、これは絵のすぐ後の詞である。大英図書館本は、手本にした絵巻を参考にしながら、あらかじめ詞のための空間を残して絵が描かれ、次に詞が書かれたと考えられる。手本を見ながら詞を写したのであれば、絵のすぐ後の詞を見まがう可能性はきわめて低いだろう。また、たとえ誤写したとしても、他の部分では誤写に気付いて紙を継ぎなおし、訂正している場合もある（前述の第一帖第二紙、第十六段詞）。したがってこの脱落は、おそらく大英図書館本書写者のミスではなく、親本か、あるいはさらに前の段階ですでに脱落していた可能性が高い。

小野家本の状況は、その傍証になるかと思われる。



小野家本も、絵の次の本文が「このおとこをはなかしけれは」から始まり、大英図書館本が脱落している部分は、絵の前に、きわめて窮屈に書かれているうえに、絵の前に「きこしめしつけて、絵を挟んで」「このおとこをはなかしければ」と文が分かれてしまい、不自然な切り方になっている（『伊勢物語絵巻絵本大成』資料篇一二六～一二七頁参照）。小野家本の詞書本文を調査された山本登朗氏も、この不自然さを指摘され、さらによく見ると、この末尾四行の直前の行は「といひてなむいにける」と書かれた後、まだ下に余白が残っているのに、なぜか途中で改行されている。これは、問題の本文①の末尾四行が、最初に書かれた際に欠脱しており、それを、本文①と絵の間に残されていた余白を使って補った結果であると考えられる。（稿者注「本文①」は第六十五段詞書本文のうち「恋せじの禊」の絵の前にある部分）と推定された。しかし大英図書館本との一致については、「この一致が偶然でない」とすれば、この欠脱は両本の共通祖本の段階で生じたものということになり、きわめて興味深い」と指摘するとどめ、本文に異同が多く両者の本文が近い関係にあるとは考えにくいとされる。

小野家本の詞書本文は、山本氏によれば、おおむね定家本

系の流布本に近い本文を持つが、不注意による誤写が多く原本の一行分が誤って脱落したものもあって「ある意味ではこの種の絵巻の本文にふさわしい庶民的な末流本文」とされる。大英図書館本の詞書本文と比較してみると、前述した天福本のみと一致して武田本ほか多くの本と対立する一六例は、ほぼすべてが小野家本とも一致しないが、逆に、大英図書館本の本文が天福本とは対立して武田本ほか多くの本と一致する二三例は、例外の第四十六段「えたいめんせで」（天福「たいめんせで」、小野「たいめむせで」など数例をのぞいて、小野家本ともほぼ一致する。

また、大英図書館本の本文が流布本と一致する第八十九段「年へにける」は小野家本とも一致して天福本・武田本の「年へける」とは対立し、武田本とのみ一致する第一百五段「おきののみやこじま」の場合、小野家本は、天福本・流布本の「おきのみで宮こじま」と同じである。

このように大英図書館本の詞書本文が定家本系の混成本文であるのに対して、小野家本の詞書本文は流布本により近く、両者の詞書本文は、同系統というには遠いように見えるのだが、それでは第六十五段の脱落はどう考えるべきだろうか。これを偶然とすれば、別々に伝流した伝本のまったく同

じ箇所が目移りによる脱落が同じように起きたことになり、その確率はきわめて低いと思われる。

この脱落は、両者のおおもとの祖本の段階ですでに生じていたと考えるべきではなからうか。ここは本文ばかりが続く箇所ではなく絵のすぐ前の詞であり、詞と絵を交互に置く「絵巻」の状態から写す段階ではなく、「詞」だけの状態から写す段階、すなわち、絵巻に詞書本文が添えられる段階で起きた脱落ではないだろうか。

## 五 おわりに

大英図書館本と小野家本は、現在は定家本系の本文を有するが、もとは非定家本系の本文をもとに絵が描かれていた可能性がある。両者とおおもとの祖本を同じくすると考えられる静嘉堂文庫本がまさに非定家本系の詞書本文を持っていることも傍証となる。

そして、ある時期、定家本系の伊勢物語伝本によって詞書が差し替えられたと考えられる。<sup>(注1)</sup>第六十五段の詞書の一部を、目移りによって脱落してしまったのはこの時ではないだろうか。そして、小野家本書写者、あるいはその親本の書写者は、この脱落に気付いて、脱落部分の本文を書き加えた。

この時接触したのが流布本系の伝本であり、流布本によって本文全体に校訂が加えられた可能性もある。そしてその後、大英図書館本・小野家本それぞれの系統で誤写が生じ、今に至った、という図式が考えられる。

定家本系の本文に差し替えられる以前、おおもとの祖本の詞書本文は、両者とも第三十段の詞の後に異本系独自章段「せかゐの水」の段の絵を持つことからすれば、真名本の配列に近い仮名書きの伝本をもとにしていた可能性が高い。

「せかゐの水」の段の絵は、鎌倉時代の制作で現存最古の梵字経刷白描伊勢物語絵巻（以下「白描本」と呼ぶ）に存する（このほか、鉄心齋乙本にも見える）。白描本の詞書本文について片桐洋一氏は、「やはり非定家本系とすべきであろうが、現存の広本系や略本系に分類してしまうこともできない。また真名本の原形（仮名で書かれていた）に通ずる面があることも確かだが、その種類に分類してしまうこともできない。要するに、今は残っていない、定家本成立以前の一つの本文を伝えているとしか言いようがないのである」と<sup>(注2)</sup>とされている。

この白描本詞書本文についての調査結果は、静嘉堂文庫本の詞書本文を調査した結果<sup>(注3)</sup>に通じる面があるのは興味深い。

静嘉堂文庫本は、現在は誤写が多く意味が通じない部分も少なくないのだが、誤写をのぞけば、非定家本系の本文をもち、真名本などに近い場合もあるが、現存するどの本に特に近いというわけでもない。

いずれも残された部分がわずかしかなく、両者に重なる章段がないので確定的なことは言えないが、大英図書館本・小野家本・静嘉堂文庫本など一群の絵巻は、もともとは非定家本系の詞書を持つ、白描本にもつながるような絵巻であったことが本文の特徴からもある程度は推測可能であると思われる。

#### 注

- (1) いずれも『伊勢物語絵巻繪本大成』(羽衣国際大学日本文化研究所編、角川学芸出版、二〇〇七年)所収。
- (2) 注1の研究篇解題(澤田和人氏との共同執筆)及び拙稿「室町期伊勢物語絵巻の一樣相―静嘉堂文庫所蔵『伊勢物語絵巻』が語るもの―」(『言語文化学研究 日本語日本文学編』第三号、二〇〇八年三月)、拙稿「静嘉堂文庫所蔵『伊勢物語絵巻』―紹介とその位置づけ―」(『伊勢物語 創造と変容』和泉書院、二〇〇九年)。
- (3) 後にも触れるが、もともとは非定家本系の伊勢物語本文をもとに絵が描かれていたと考えられる。以下、前稿と一部重複する部分があるが、本稿をもって現時点での決定稿とした。

伊勢物語の絵巻をさかのぼる―大英図書館所蔵『伊勢物語図会』とその周辺―

(4) 第一帖は尾紙をのぞいて現在三六紙であるが、第三二・三三紙と、第三四〜三六紙はもと一紙なのでそれぞれ一紙と数えている。

(5) 『鉄心齋文庫所蔵伊勢物語図録 第十九集』(鉄心齋文庫、二〇〇〇年)に絵のすべてと解題(片桐弥生氏)所収。図録番号は甲本が2、乙本が3。また注1の『伊勢物語絵巻繪本大成』に絵の一部と解題(山本登朗氏)所収。

(6) 注4の『鉄心齋文庫所蔵伊勢物語図録 第十九集』解題。

(7) 定家天福本の引用は『御所本 伊勢物語 宮内庁書陵部蔵 冷泉為和筆』(一九八一年、笠間書院)所収の影印による。改行は原本通りとした。

(8) 注2の拙稿参照。

(9) 注1の『伊勢物語絵巻繪本大成』白描本解題(片桐洋一氏)。

#### 〔付記〕

本稿は二〇一〇年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「物語・説話における絵画化の起源と変容の研究―日本近世刊本・写本を中心に」(研究課題番号二一三二〇〇三四)による研究成果の一部である。

(あおき しづこ・本学准教授)